

光学会設立記念シンポジウム開催報告

一般社団法人日本光学会の設立を記念して、標記シンポジウムが1月16日(金)、「ハイライフプラザいたばし」にて開催された。総勢70名を超える参加者に加え、多数の報道関係者の出席のもと式典が行われた。初代会長に就任した黒田和男氏(宇都宮大学)の挨拶では、設立までの紆余曲折と、期せずして「国際ひかり年」の今年、新法人の活動が開始となったことの意義、そして応用物理学会をはじめ協力を頂いた各方面の方々、特に共催団体として今回の会場の提供や4月以降の事務局の設置などで協力を頂く板橋区と、設立に当たり新たな会員情報システムの導入に協力を頂いた(株)オプトロニクス社への謝辞が述べられた。

引き続き公益社団法人応用物理学会会長の河田聡氏(大阪大学)および元日本光学会幹事長の鶴田匡夫氏(元(株)ニコン副社長)よりご祝辞を頂いた。河田氏からは光学誌および欧文誌(Optical Review)の出版権の移管を含めた応物学会サイドの動きについての説明があり、設立を機会に時代の多様化や変化を受け入れ新しい光学の分野を切り開いてほしいとのエールを頂いた。鶴田氏からは、氏が幹事長だった88~89年の光学懇話会という分科会名から日本光学会と名称を変えたこと、それを皮切りに学術講演会 Optics & Photonics Japan (現名称)の発足(91年)や欧文誌 Optical Review の創刊(94年)が実現したことを紹介され、光学の分野で依然として解決されておらず意見の分かれるテーマについて議論を交わすことのできるようなシンポジウムの拡充など、法人格を得るにふさわしい活動を目指してほしいとの期待を込めた言葉を頂いた。

式典の最後に副会長の谷田純氏(大阪大学)より設立経緯の報告がされた。52年の光学懇話会設立以来の歴史を振り返り、法人格を持たないことによる国際的な認知度の低下や2011年の応用物理学会の公益法人化に伴う活動の窮屈さなどが新学会設立の機運に繋がったこと、2014年6月に全会員の投票により有効投票の93%の賛成で新学会への移行が可決、同年9月に一般社団法人日本光学会が登記されたことが報告された。現在一般会員は約600名、学生会員約40名、賛助会員、特別会員を合わせると総数700の会員数となるが、これはまだ以前の半数に過ぎず、今後更に増やしたいこと、また、意思決定のスピードを重視した新学会の組織構成や理事の担当、OSA、SPIEなど他学会とのMOUの状況、今年度の事業計画、予算の説明等がなされた。

シンポジウム講演は下記の6件(敬称略)であった。個々の詳細は割愛するが、何れも各分野の最新の成果を含み今後の研究・開発方向を示唆する内容で、質疑応答も活発に行われ大変有意義な講演会となった。多忙な中貴重な講演を頂いた講師の先生方には、心から感謝したい。

1. 量子ドット・フォトニック結晶ナノ共振器結合系における光学 — 固体共振器量子電気力学の発展 —
荒川泰彦(東京大学)
2. ナノオプティックスのこれから — 新しいアプローチを求めて —
斎木敏治(慶應義塾大学)
3. 誘導ラマン分光顕微鏡 — 非線形光学への期待をこめて —
伊東一良(大阪大学)
4. シンセティック統計光学 — 波動場の揺らぎの制御と統計的秩序の生成 —
武田光夫(宇都宮大学)
5. 高精細光学系における波面測定法の発展
市原裕(ニコン)
6. すばる望遠鏡用主焦点補正光学系の開発
松田融(キヤノン)

講演終了後に行われた情報交換会は更に板橋区の企業を中心に多数の参加もあり総勢90名の盛大な産学公の交流の機会にもなった。黒田会長と、多忙な中駆けつけられた板橋区長の坂本健氏による主催者挨拶、応用物理学会会長の河田聡氏、東京工業大学名誉教授の来賓挨拶に続き、地元企業の代表として(株)トプコン執行役員の靱内正幸氏が乾杯の発声をされた。途中、シンポジウム講演の講師の方々からの一言、パネル展示を伴う参加企業の紹介のあと、板橋区を代表して産業経済部産業戦略担当課長の諸橋達昭氏のご挨拶があった。そして最後に谷田副会長からの日本光学会の今後の発展への決意をこめた閉会の挨拶でお開きとなった。

最後になるが本シンポジウム開催に当たって会場他準備の統括、情報交換会の司会を担当された風間智晴氏、小川奈美氏他、板橋区の方々には大変お世話になった。この場をかりて感謝の意を表したい。（宮前 博）

